

主な鉄工所、造船会社なども被災した。生活や復興には収入が必要とあって、「23年度は漁協が出した方針でやるしかない」と話

同漁協によると、震災前に約200あった経営体のうち、9割が被災後も漁業を続ける意向を示している。一方で、各地の漁港被害は壊滅的で、海中には陸地から流出したガレキも散乱。課題は山積している。

船を失い、個人での漁業経営が難しい漁業者も多い。同漁協は漁業者の収入を確保し、漁港や数少ない船を効率的に活用するため、本年度は地域や数人の漁業者による協業体でワカメ、コンブの生産を行う。新規漁業者にも門戸を広げたいとしている。

種苗については、ワカメは沖合の養殖施設に残ったメカブや天然ワカメから採取。コンブは北海道から調達する。ワカメは今後、6月下旬をメドに採苗作業に入る予定で、現在は各地に設ける種場の確保や、碇などの用意を進めている。収穫時には加工もできるよう、漁協の加工場も復旧させる計画だ。

出荷までに2〜3年を要するカキ、ホタテについても対策を講じる。カキは稚貝の見通しが立ったほか、ホタテは北海道から大きさを7〜10センチに成長したものを用意し、来年の収穫、出荷を目指す。佐々木組合長は「漁業者のやる気に対し、漁協としても一体となって準備したい。そのためにも、漁港や養殖

施設の整備、種苗費用の助成などには国にしっかりと対応してもらいたい」と言及する。復興に向けては、「震災をバネにし、世界に冠たる漁業経営を構築していくチャンスでもある。年数はかかるかもしれないが、震災前とは違った近代的な漁村づくりを進めたい」と意欲を見せている。

ワークショップの閉会式では、5年の村上芽唯さんが「絵を描くのが大好き。素敵な色で描くことができて楽しかった」と感想。6年の小松朋可さんは「自由に絵を描けて楽しかった。皆さんが応援してくれることを忘れず頑張りたい」と感謝した。実行委は、教職員らにも物資を贈呈。一ノ瀬さんは「小さいころから遊びに来ていた父のふるさとで、少しでもできることをしたい」と行った。贈り物を通して仲間がいると感じてもらい、これをスタートに被災地の子どもたちに寄りそっていかたい」と話す。

## 愛で元気づける

### 小学校 鎌倉の団体が訪問

陸前高田市立矢作小学校（佐藤和也校長、児童77人）に10日、神奈川県鎌倉子どもチャリティー実行委員会・ハートワン（井上アンナ委員長）が訪問した。絵を描くワークショップを行い、全校

児童に文房具などが入った「愛の袋」を贈って元気づけた。同委員会は、東日本大震災を機に「被災地の子どもたちに愛と勇気と希望を届けたい」と設立し、鎌倉市内でイベントなどを展開。事務局を務める一ノ瀬美和子さんの父・佐々木靖文さんは下矢作の出身であり、伯母・佐々木美津子さんを通じて同校を訪ねた。

児童らは絵の具やペンなどを手に、用意された画用紙へ思い思いに作画。「がんばろう日本」助け合う」などのメッセージを入れた子もあり、実行委らと交流を深めながら絵を描く楽しさを満喫した。作品は、海外に届けられるという。愛の袋は、子どもたち一人ひとりにプレゼント。中には、神奈川県内の個人や企業などから寄せられた文房具や菓子などの物資、海外からのメッセージが入っている。井上委員長は「子どもたちが、本当に楽しかった」と言ってくれてうれしかった。遠くから届けられたメッセージを通して、世の中の子どもたちがつながっていることを肌で感じてほしい」と、活動の継続を誓っていた。



この日は井上委員長、一ノ瀬さん、浅葉和子さん、神田亜紀さんの4人が来校。ワークショップ会場の体育館には、鎌倉のイベントで描かれた大きな絵が飾られた。



戸田市長（左）に手渡す永井会長（右）大船渡市役所

頭手える

度

がアカペラで「朧月夜」を熱唱し、ピアノ

した。

度

この度の大災害で被災された皆様に心よりお見舞い申し上げます。営業再開しております  
**買取り致します！お気軽にご相談下さい。**

セレモニーホール「千の風」からのお知らせ  
三陸町綾里字清水201-1  
ホーリ、使用料／無料（通夜・葬儀・忌中払い）  
社では地域復興支援の